平成２０年度「発達障害早期総合支援モデル事業」報告書（中間・最終）

都道府県名	京都府
地域名	福知山市
研究期間	平成１９～２０年度

Ⅰ　概要

1　研究課題

発達障害を早期発見し、発達障害のある幼児及び保護者に対する早期からの適切な支援を開始し、就学に向けたスムーズな支援の移行を行うための体制づくりを、保健・福祉・医療・教育の連携により整備し、福知山市の総合的な早期支援体制を確立。

2　研究の概要

①就学前幼児の相談・支援機関として昨年度設置した通級指導教室幼児部を増設し、４歳児クラス健診後の事後支援や事後支援終了後の幼児等、発達障害のある幼児の教育相談を行うとともに、就学に向けた就学予定の学校と保護者との連絡調整相談を、市の「特別支援連携チーム」との連携により実施。

②発達障害の早期発見のためのスクリーニングを実施。

③保護者・園指導者・教諭・管理職を対象にした講演会及び研修会の実施及び園・学校への巡回指導及び支援指導を実施。

④保育園・幼稚園での支援を小学校につなぐ「個別の移行支援シート」（個別の教育支援計画に替わるもの）の作成及び各園への普及。

3　研究成果の概要

就学前の５歳児を対象としたスクリーニングにより、就学前に支援が必要な子どもを発見し、通級指導教室幼児部（２教室）において個別の支援を実施した。

幼児部において、連絡ノート等を活用した在籍園との連携を実施、個別の指導と併せて、集団場面での支援や配慮の工夫・変更の必要性を園に伝えることで、より適切な支援を在籍園や家庭でも行なえるようになり、子どもの困り感や保護者の不安軽減を図ることができた。

「個別の移行支援シート」の活用により、スムーズな就学が実現した学校が増えた。

また、管理職や特別支援教育コーディネーター等の研修会を通じ、就学先の学校での特別支援教育体制を更に充実させ、学校体制で支援できるよう体制強化を図った。

「４歳児クラス健診」との連携では、保健・福祉・医療・教育の連携により４歳児クラスの子どもを就学まで支援する市の事業「のびのび福知っ子（就学前発達支援事業）」が立ち上がり、それぞれの機関がその特性を生かしながらより強力に連携し、子どもや保護者の支援にあたるシステムがスタートした。

“のびのび福知っ子”システムガイドを作成し、事業活用の手引きとして、またシステムの啓発資料として各園・小学校及び関係機関に配布し、支援システムの周知を図った。

Ⅱ　詳細の報告

1　モデル地域の名称

NO	モデル地域名
1	福知山市

2　モデル地域内の幼稚園・保育所・学校数及び幼児児童数

(1) 幼稚園・保育所

モデル地域内の学校	幼稚園		保育所		合計	
	園数	幼児数	か所数	幼児数	園・か所数	幼児数
福知山市	8	４６６	３５	２,４２３	４３	２,８８９
合計	8	４６６	３５	２,４２３	４３	２,８８９

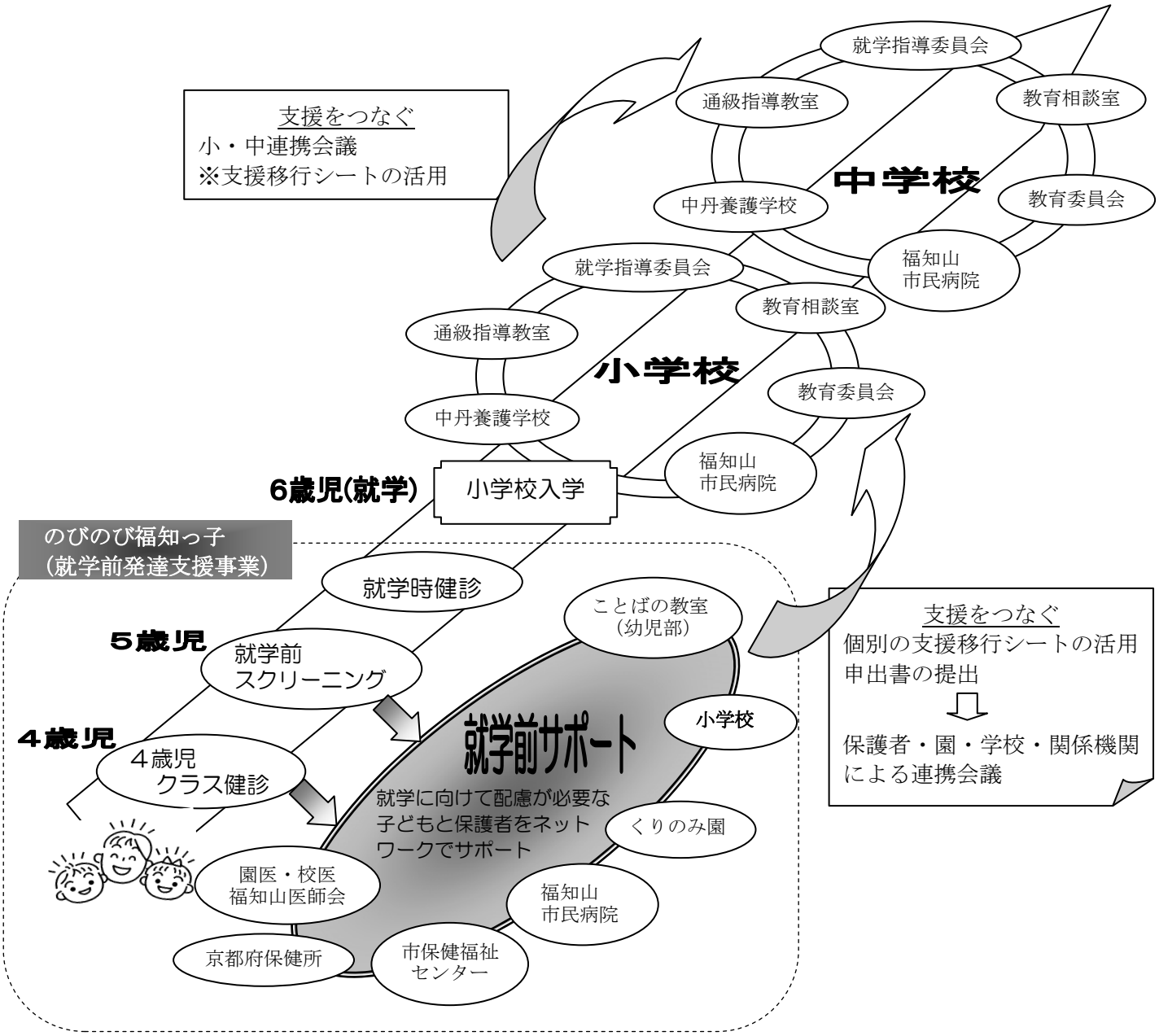
(2) 小学校

モデル地域内の学校	小学校	
	学校数	児童数
福知山市	２７	４，８０６
合計	２７	４，８０６

(3) 特別支援学校

モデル地域内の学校	特別支援学校					
	学校数	幼児児童数の内訳		教職員数	ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ数	支援員数
福知山市	1	幼児数	0	２９	3	0
		児童数	２８			
合計	1	幼児数	0	２９	3	0
		児童数	２８			

3　事業全体の概念図



4　事業の内容

(1)早期総合支援モデル地域協議会

ア 構成

NO	所　属　・　職　名	備　　考
1	京都教育大学付属特別支援教育臨床実践センター・准教授	スーパーバイザー
2	私立幼稚園・園長	
3	公立幼稚園・園長	４歳児クラス健診実施園
4	公立保育園・園長（２園）	〃

5	私立保育園・主任保育士（２園）	４歳児クラス健診実施園
6	公立小学校・校長（２校）	地域協議会 会長
7	公立小学校・通級指導教室担当教諭（２名）	※１名は特別支援教育士ＳＶ（市特別支援教育コーディネーター任命者）
8	〃　・通級指導教室幼児部担当幼稚園教諭・保育士	
9	福知山ことばを育てる親の会	保護者代表
10	福知山ＡＳの会	保護者代表
11	市役所健康推進室・保健師（２名）	４歳児クラス健診担当者
12	〃　社会福祉課・看護士	
13	〃　子育て支援課・主事	のびのび福知っ子担当者
14	〃　心身障害児通園療育施設・園長	のびのび福知っ子総括
15	〃　心身障害児通園療育施設・主任児童指導員	のびのび福知っ子総括
16	教育委員会学校教育課・課長	
17	〃　・指導主事（２名）	
18	〃　・主査	

イ 開催回数・検討内容

開催回数：５回

回数	検討事項	検討内容
1	モデル事業および就学前発達支援事業“のびのび福知っ子”について	モデル事業の概要と今年度立ち上がった就学前発達支援事業“のびのび福知っ子”の事業概要について説明。今後の課題について検討。
	支援の移行ツールについて	「申出書」および「個別の移行支援シート」（試作品）について、小学校にとったアンケート結果を報告。様式や配布時期・配布方法等について検討。
2	システムガイドの作成について	“のびのび福知っ子”事業内容の啓発及び事業利用の手引きとして活用できるシステムガイドの作成について検討。
	ミニ講座「早期支援に必要なこと」講師：京都教育大学相澤雅文准教授	早期支援の有効性や移行期プランの重要性、また就労に向けた早期からの支援の重要性について、現状や課題を提起。それぞれの立場から意見交換。
3	ガイド作成について	ガイドの全体構成や、原稿の内容について、より分かりやすく、活用しやすいものになるよう検討。
4	ガイド作成について	ガイドの詳細にわたり内容を検討。
5	発達障害早期総合支援モデル事業福知山市実践報告会について	モデル事業の実践報告会における役割分担、及び当日の流れについて確認、検討。

ウ 早期総合支援モデル地域協議会における取組の成果と今後の課題

成果

(ｱ) 今年度はスーパーバイザーの参加により、多岐にわたりアドバイスをいただけた。地域協議会の委員に保護者を加え、システムの作り手だけでなく使い手の意見を取り入れながら、よりよいシステム作りについて検討することができた。

(ｲ) 就学前の子どもを支援する機関（園・療育教室・通級指導教室・小学校・保健・福祉・教育）及び支援を受ける保護者が一緒になり、スムーズな就学に向けた取組みについて意見交流することができた。

(ｳ) 同じ課題について意見交流する中で互いの立場を理解し、その理解にたった上で、現行の支援システムの課題等について検討することができた。

(ｴ) 特に私立園から意見が多かった就学前の支援システムの分かりにくさについて、忌憚のない意見をいただくことができ、“のびのび福知っ子”システムガイドの作成が実現できた。ガイドについては私立園以外からも「非常に分かりやすく、手元において活用しやすい手引書」との評価を得ることができ、園や学校、その他関係機関において就学前の支援事業の啓発に効果を上げた。

課題

(ｱ) 就学前発達支援事業“のびのび福知っ子”の事業の趣旨や内容を保育園、幼稚園、小学校の指導者及び保護者や市民に対し、更に周知徹底する必要がある。

(ｲ) 幼児期における配慮や支援について、就学先につないでいくシステムは整ってきたが、就学後、いかにその支援を引き継ぎ個に応じた支援を展開していけるか、学校における支援体制のあり方や指導者の力量アップを図る必要がある。

(ｳ) 保育園・幼稚園と小学校がお互いの現場（保育内容・園環境・教育内容・学校環境など）についての理解が、十分でないことから就学連携が進んでいない部分がある。今後、校種別を越えた理解を進めるための連携をはかる機会（研修等）が必要である。

(ｴ) 就学した後も、支援をつないだケースについては園に対してフィードバックし、支援について検証する必要がある。

(2) 相談・指導教室

ア 構成 ※相談は通級指導教室初回相談を窓口とした。

		所属・職名	備考
相談	1	惇明小学校・通級指導教室担当教諭	
	2	〃 ・ 〃 〃	
	3	昭和小学校・通級指導教室担当教諭	特別支援教育士ＳＶ（市特別支援教育コーディネーター任命者）
	4	〃 ・ 〃 〃	
	5	〃 ・ 〃 〃	
	6	〃 ・ 〃 〃	

	7	昭和小学校・幼児部担当幼稚園教諭	
	8	〃　・　〃　保育士	
	9	南陵中学校・通級指導教室担当教諭	
指導教室	1	昭和小学校・幼児部担当幼稚園教諭	
	2	〃　・　〃　保育士	

イ　相談・指導教室の概要（箇所数・実施回数・対象者等）

指導教室名称		昭和小学校通級指導教室　幼児部　２教室
教育相談	相談日	毎週木曜日午前中
	相談件数	９７件
	対象者	３～５歳児（※３・４歳児は２６名のみ） （スクリーニングで『何らかの支援が必要』と判断された子ども 園や保護者から相談希望があった子ども）
通級指導	指導日	１人当たり　平均１回／２週間
	指導人数	通級幼児数　７９名 （５歳児　６４名 ４歳児　１４名 ３歳児　１名） 観察幼児数　３２名 （５歳児　２０名 ４歳児　９名 ３歳児　２名 ２歳児　１名）
	対象者	４・５歳児を中心とする就学前幼児
	通級幼児の実態	・知っている語彙数が少ない ・表現力が乏しい ・落ち着きがない、又は集中が持続しない ・自己肯定感が感じられにくく消極的 通級理由は、言葉の発達課題であっても、その裏に発達障害等の課題が隠れている場合あり 《主な通級理由》 ・構音障害　・言語発達遅滞　・吃音　・難聴　・高機能広汎性発達障害

ウ　主な実施内容

《個別指導》　・構音指導

・音韻操作を利用したことば遊び・連想ゲーム等による「言語理解」の指導

・体全体を使った運動遊び

《集団指導》　・待つ力（気持ちをｺﾝﾄﾛｰﾙする力）をつける為の集団遊び

・苦手な感触等に楽しみながら慣れる小麦粉粘土等を使った制作遊び

《園との連携》・在籍園訪問による、集団場面での行動観察と園からの情報収集

・連絡ノートを活用した園との連携（園及び保護者との情報の共有）

・就学時の支援の移行連携に向けた通級児連絡会（１～２月ごろ）

エ 成果と課題

(ｱ) 通級指導教室を開設し２年目になったことと、１教室増設し保育士を配置したことにより、園の認知も深まり利用しやすいものとなってきた。

(ｲ) 在籍園への行動観察や連絡会、連絡ノートの活用などを通して、幼児の実態把握を客観的に行うことができた。またそれを在籍園と共通理解し、集団の場と個人指導の場というそれぞれの利点を活かして、効果的に発達を促すことにつながった。

(ｳ) 在籍園から、指導見学や情報交流のため、担任が通級指導教室を訪問する園が増え、連携が深まった。

(ｴ) ４歳児クラス健診後の事後支援として、「うきうきわくわく初回相談」を実施したことにより、来年度年長になった幼児を、早くから支援することができる。また、この事業をくりのみ園と共同で行ったことにより、福祉との連携がしやすくなった。

(ｵ) スクリーニング後の再相談件数が多く、年度末まで待機してもらうケースも多い。また再相談後、２学期後半になっても通級指導児が大幅に増えてくるので、就学までに十分な支援ができない。来年度以降は「うきうきわくわく初回相談」との並行により、もう少し早い時期から通級が開始できる見通しである。

(ｶ) 通級指導児の増加により在籍園数も増え、指導時間数の確保と、在籍園との行動観察や通級児連絡会を行う日程の確保が困難な状態である。

(3) 教育相談会・講演会

ア 教育相談会・講演会の概要

Ⅰ．管理職研修

１　対象者　：　第１回：小中学校教頭　　第２回：小中学校（３７校）学校長

２　開催回数：　２回

第１回：平成２０年６月２４日（火）　午後２：００～４：３０

研修ﾃｰﾏ	特別支援教育で学校が果たすべき役割	参加者	教頭　３５名
講師	竹田 契一 （大阪教育大学　名誉教授）	演題	「特別支援教育と管理職の役割」
内容	最新の全国的な動向も踏まえながら、特別支援教育の推進に学校は何を求められているのか、教頭のはたすべき役割について学ぶ。		

第２回：平成２０年９月１１日（木）　午後２：００～４：３０

研修ﾃｰﾏ	教育におけるノーマライゼーションについて先進的な実践に学ぶ	参加者	学校長　３４名
講師	水嶋　純作 （聖ヨゼフ学園日星高等学校　校長）	演題	「特別でない特別支援教育」
内容	特別でない特別支援教育を実践するために、どのように校内体制を作っていくのか、管理職としてしなければならないことについて学ぶ。 ・グループワークによるチームコミュニケーションの実習 ・校内体制づくりと校長の役割について		

Ⅱ．コーディネーター研修

１　対象者　：　小中学校特別支援教育コーディネーター（各校２名）

※　第２回は教職員全員

２　開催回数：　２回　　※第２回は教職員研修と兼ねる

第１回：平成２０年７月３日（木）　午後３：００～５：００

研修ﾃｰﾏ	コーディネーター１年間の仕事	参加者	３９名
指導者	奥村 康枝（昭和小学校通級指導教室教諭、市特別支援教育コーディネーター、特別支援教育士SV）	助言者	大槻美江子（指導主事） 根垣万里子（指導主事）
内容	コーディネーターとしての仕事（役割）を知り、各校における実態把握の方法、チェックリストの活用方法について学び、１年間の見通しを持って役割を遂行できる力をつける。		

第２回：平成２０年８月２０日（水）　午後０：５０～３：２０

研修ﾃｰﾏ	先進的な実践に学ぶ	参加者	１２９名
講師	山田　充（堺市立日置荘小学校通級指導教室教諭、堺市ＬＤ研研究部長、特別支援教育士SV）	演題	「子どもの特性を理解した支援を」 ―個別・通常での支援の実際―
内容	発達障害の特性理解と日々の実践の中で即活かされる具体的な支援方法について学び、授業改善や環境整備について役立てる。 		

Ⅲ．特別支援学級担任研修

１　対象者　：　小中学校特別支援学級担任及び特別支援教育コーディネーター
※特別支援学級担任は必須

２　開催回数：　２回

第１回：平成２０年６月１０日（火）　午後３：００～５：００

研修ﾃｰﾏ	特別支援学級での発達課題に応じた支援と通級先としての役割		参加者	４１名
指導者	川髙　寿賀子 （京都府教育庁指導部特別支援教育課指導主事）	演題	「特別支援学級における担任の役割について」	
内容	特別支援教育の法制度や考え方について学ぶとともに、特別支援学級担任の果たすべき役割や日々の具体的な支援方法について学ぶ。			

第２回：平成２０年７月２５日（金）　午後１：１０～５：００

研修ﾃｰﾏ	子どもも教師もいきいきと学べる授業づくり		参加者	２８名
指導者	奥村　康枝 （昭和小学校通級指導教室教諭、市特別支援教育コーディネーター、特別支援教育士SV）	演題	「特別支援学級の授業づくりについて」	
	蘆田　照代 （ふくちやま造形フェスタ実行委員長）	実習	「特別支援学級における有効な制作活動」	
内容	・子どもも教師もいきいきと学ぶ授業づくりを実践するために、大切な視点を学ぶとともに、「個別の教育支援計画」作成について実践例を参考にしながらその有効性について学ぶ。 ・子どもの興味関心をひきつけ、夢中になれる楽しい制作活動を体験し、いきいきと学べる授業づくりに活かす。			

Ⅳ．スクールサポーター研修

１　対象者　：　小中学校スクールサポーター、幼稚園加配教諭

２　開催回数：　１回

第１回：平成２０年９月１日（月）　午後１：００～午後３：００

研修ﾃｰﾏ	発達障害など支援が必要な子どもたちへの対応に関する基本的な理解		参加者	２６名
講師	奥村　康枝 （昭和小学校通級指導教室教諭、市特別支援教育コーディネーター、特別支援教育士SV）	演題	「特別な配慮と支援を必要とする子どもたち」	
内容	発達障害の基礎知識とともに、具体的な子どもの様子と正しい支援のあり方について学び、日々介助している子どもたちへの適切な支援に活かす。			

Ｖ．子育て講演会

１　対象者　：　保護者、保育園・幼稚園指導者、小中学校教職員

２　開催回数：　１回

第１回：平成２０年１２月２０日（土）　午後１：３０～午後４：００

研修ﾃｰﾏ	子どもの違いを認め、違いに向き合い、楽しく子育てをするための子育てのヒント	参加者	６５名
講師	熊本　敬一 （NPO法人おひさまと風の子サロン副理事長 元福知山児童相談所相談判定課長）	演題	「子どもの違いを認める子育てについて」
内容	親子の関わりの中でどのように子どもが成長していくのか、どのようにして問題行動を起こすようになるのかについて、子どもとの関わり方、子どもの捉え方について学ぶ。		

イ　成果と課題

(ｱ) 管理職や特別支援教育コーディネーター対象の研修に加え、特別支援学級担任研修やスクールサポーター研修も実施し、就学後の支援体制の充実を図るため研修を深めた。

(ｲ) 保護者も対象とした子育て講演会を実施し、発達障害のあるなしに拘らず子どもの違いに向き合い、認め、楽しく子どもと関わるヒントを学んでいただけた。

(ｳ) 障害のある子どもの保護者ばかりでなく多くの市民に参加していただける子育て講演会を開催する工夫をし、発達障害の理解啓発を推進する必要がある。

(ｴ) 特別支援教育を推進させている学校と、そうでない学校との温度差が依然としてある。

(ｵ) 研修会への通常の学級担任等の参加が少ない。今後は出前講座等の押しかけ方式により、学校や園全体の知識の底上げを図るよう工夫をする。

(4) 早期発見・早期支援

ア　早期発見

(ｱ) モデル地域内での具体的な取組

事業名	就学前スクリーニングの実施		
対象者	就学前５歳児全員	実施時期	５月～１０月上旬
実施方法	就園先（保育園・幼稚園）で実施　※未就園児は別途会場での実施 →　園巡回相談の機能（園での支援についての指導・助言）		
検査者	通級指導教室担当者：幼児部（２名）、小学校（６名）、中学校（１名） 中丹養護学校地域支援コーディネーターとの連携		

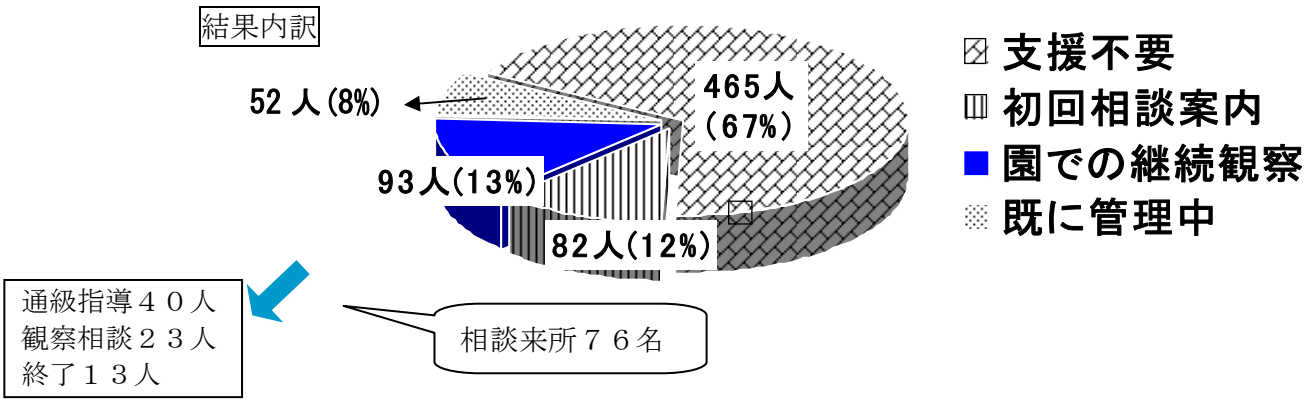
就学前スクリーニングの流れ

園との事前ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ ⇨ 個別面談 / 行動観察 ⇨ 園との事後ｶﾝﾌｧﾚﾝｽ ⇨ 結果報告（園へ文書で）

◆保護者へは園から結果を報告 → 園での経過観察 / 初回相談への案内（通級指導教室）

(ｲ)本年の成果

実施園：幼稚園８園　保育園２１園　　実施園児数：６９２名（就学予定児の約８８％）



ａ．４歳児クラス健診による早期発見、早期支援が行われるようになり、スクリーニング前に支援につながるケースが増えてきた。

また、4歳児クラス健診では、保護者が受け入れられなかったケースについても、その後の園巡回やスクリーニングにより園支援が可能となり、支援が必要な幼児に対して何らかの支援を行う体制が整ってきた。

ｂ．園のスクリーニング機能が高まり、就学前スクリーニングを待たずに園での気づきにより初回相談につながるケースが増えてきた。

(ｳ)課題と今後の方針

ａ．４歳児クラス健診・スクリーニングの全園完全実施を目指すとともに、別途会場による実施についての案内の周知を図る。

イ　早期支援

(ｱ)モデル地域内での具体的な取組

ａ．通級指導教室幼児部の増設

ｂ．園巡回（４歳児クラス健診事後支援）への市特別支援教育コーディネーターの同行

(ｲ)本年の成果

ａ．通級指導教室幼児部の設置による成果は「（２）相談・指導教室」に記載

ｂ．園巡回（４歳児クラス健診後、保護者了解が得られないため事後支援につながらなかった子どもの経過観察として実施）に、市特別支援教育コーディネーターが同行することで、園支援及び４歳児クラス健診との連携を行うことができた。

(ｳ)課題と今後の方針

ａ．通級指導教室幼児部の設置による課題は「（２）相談・指導教室」に記載

(5)学校等への円滑な移行方法の工夫（就学相談等を含む）

ア　モデル地域内での具体的な取組

(ｱ)　特別支援連携チーム（巡回チーム）の活用

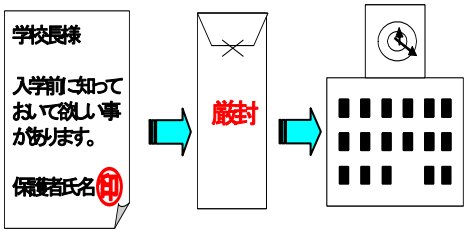
市の就学指導委員会に教育相談のあったケースで、就学判断について「通常学級」が明らかな子ども（発達障害などの特別な支援が必要な子ども）の、就学に向けた相

談先を特別支援連携チームとした。

〈チームの構成〉　指導主事、通級指導教室担当者、教育相談員、臨床心理士

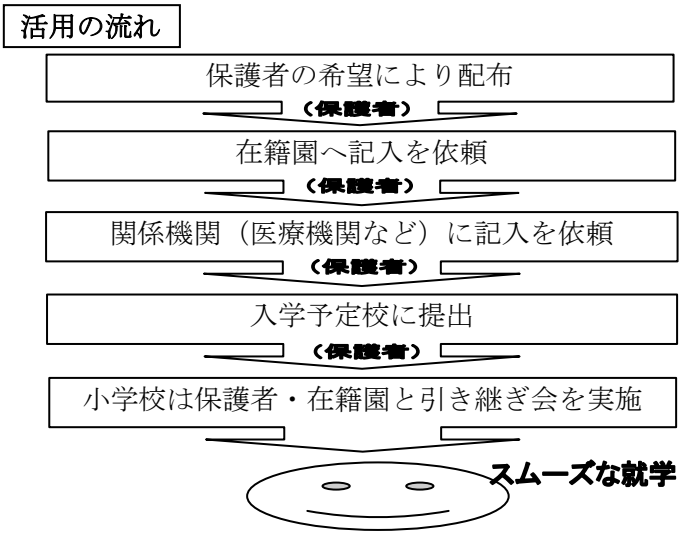
(ｲ) 申出書の作成

全就学予定児の保護者に対し、「申出書」を配布。保護者の意思で、子どものことについて気になることを入学までに学校へ伝え、在籍園や関係医療機関等との連携が必要なケースについて、学校側から入学前に働きかけることができた。



(ｳ) 個別の支援連携シートの作成

就学先に、これまでの支援を引き継ぐツールとして「個別の移行支援シート」を作成し、何らかの配慮や支援が必要な幼児の保護者に対し、希望により配布。



イ 本年の成果

(ｱ) 移行支援シートを活用することにより、特別支援連携チームの支援や就学に向けた小学校との連携がよりスムーズに、より効果的に行えた。

(ｲ) 申出書の提出状況　　入学予定児の約１３％

申出書の主旨や活用について園での理解が深まり、必要な幼児の保護者に対して適切な声かけが行われるケースが増えた。

(ｳ) 個別の移行支援シートの提出状況　　入学予定児の約４％（平成21年3月16日現在）

支援シート活用希望者が多く、今までの様子や支援が確実に伝えられることに安心したり、気づかれにくい部分を細やかに見てもらえることに期待したり、入学前に学校と話し合いができることを喜ぶ保護者が多い。

学校としては移行支援シートの提出により学級編制資料として役立てることができている。また園・関係機関との情報共有により効果的な支援につながり、入学直後の対応についても非常に役立ち、適切な支援が実現した学校が多かった。

ウ 課題と今後の方針

(ｱ) 支援シートを提出すると、大げさになってしまうのではないか、決め付けた見方をされるのではないかと不安に思い、揺れ動かれる保護者もいる。正しい理解で、就学後も

引き続き子どもの成長に応じた適切な支援を継続するために職員のスキルアップを図るとともに、今後も保護者に寄り添いながら適切な支援やアドバイスを行う必要がある。

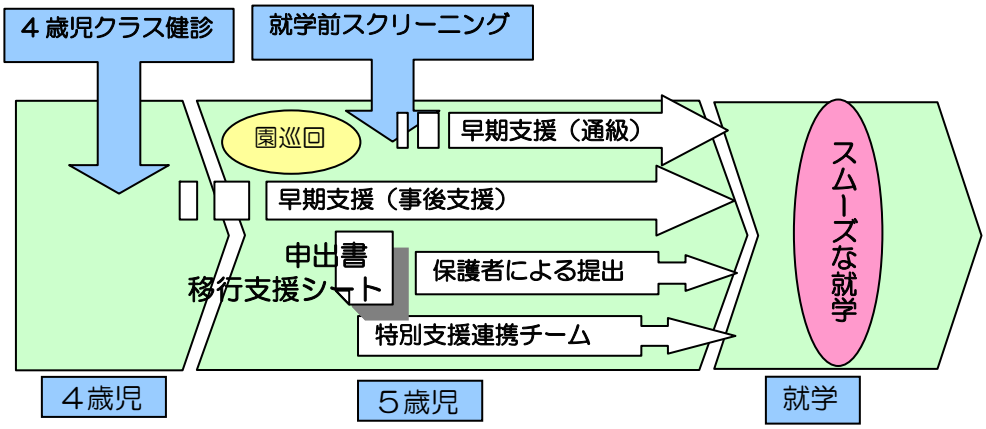
(ｲ) 保護者に対してアンケート調査を行い、システムの検証をする必要がある。

(6)関連事業等との連携

「４歳児クラス健診との連携」

保健・福祉・医療・教育が連携しながら、就学前の４・５歳児の時期に発達障害等の早期発見、早期支援を行なうことで、全ての子どもが自分らしさを生かしながら、自信をもって就学できるようサポートする市の事業、“のびのび福知っ子”（福知山市就学前発達支援事業）が今年度スタートした。４歳児クラス健診と就学前スクリーニングを一つの事業として行うことで、情報共有を図り、関係機関と共に事後支援を行う等、より強力な連携のもと、それぞれ関係機関の特性を生かしながら、就学まで継続した支援を行うシステムを構築した。

“のびのび福知っ子”就学前発達支援事業の流れ



(7)その他特記事項（エピソード等を含む）

幼児部が設置されて２年目だが、その情報は口コミでも保護者に広まり、「うきうき教室って楽しいところなんですよね。楽しみにして来ました。」とか「うきうき教室に行くと行ったらお友達にうらやましがられました。」と言われる保護者が何人もいた。

(8)総括

以前から少しずつ支援体制を整えていたこと、保健・福祉・医療との連携を図り始めていたことにより、概ね予想どおりに成果が得られた。幼児期の支援体制が整う中で、その有効性を実感し、子どもたちの成長を楽しみに見守りつつ、常にシステムの検証を行う必要がある。

今後は生涯にわたり一貫した支援の実現を目指すとともに、特に思春期の支援のあり方、支援の連携、地域を巻き込んだ支援体制について重点的に取り組む必要がある。